

# 偶 感

四八

## 堺市 大塚 喜 一

或る春の日に、宅の子供と近所の子供との二人

は、庭で旗體操をしてゐる。僕はそれを二階から見てもたが、動作がお母ちゃんのお口ずさんでゐられる譜に合つてゐないで、めい／＼勝手々々な事をしてゐる。二人共此遊戯は幼稚園で習つたのである。動作が間違つてゐる事を僕が注意したが知らぬ風であつた。

後で僕は宅の子供に「あの遊戯を知つてゐるではありませんか」と尋ねた所、「知つてゐるがあんなにしては面白い事ない」と、茲に於て僕の頭には一つの問題が起つた。

あの旗體操の動作通りにやらすのと、こゝいふ風に勝手々々にやらすのと、何れが子供の本性に

適したものであらうか。

あの旗體操の動作が、子供の内なる活動力を發表せしむるに適當の教材であるならば、既に之を習得せる子供は喜んでそうするであらうに。尤も勝手々々の動作をする事の教育効果は餘りないであらう。弊害は無いだけで、教育的に消極に傾いたものである。然らばこの動作を子供の本性に適する様に改良する道は無いてあらうか。その標準を何處に求むべきであらうか。

人形歡迎の「星の國から……」の唱歌の中で、殊に「どうぞこちらへ櫻の下で」と云ふあたりは僕には優美に麗はしく聽かれた。然るに實際、二三の子供にきいて見ると「あの歌あんまり好きで

ない」といふ答であつた。然らば僕が感じてゐたこの歌の妙味は「大人の見た子供の世界」であつて「子供自身の世界」では無いのであらうか。

この歌は子供に自分の歌として歌はせるに適し兼ねるのであらうか。

幼稚園雑草 二七五―二八八頁「教育問答」中の「どうして子供にほんとうに自分の繪を描かせるか。」

「それは繪だけの話ですがね。子供の生活全體に同じ問題がありますね。」

は兼てより僕の頭にひつかかつてゐた箇所であるが、今上述の問題に關聯して、更に大正十三年の岡山での大會の折の倉橋教授の講演筆記（「生命表現としての藝術教育」とでも云はうか）とも對稱されて、更に興味あり、しかも難解なる諸問題が見え出して來た。

「幼兒には、習つた唱歌や遊戲の批評や優劣好嫌等の鑑別力はさうあるものではない。彼等の評價は時には氣まぐれな事もある。」と或人は云ふであらう。自分にもさう思はれる節がある。然し、幼

兒をして、心ゆくばかりに愉快に感ぜしめる迄に彼等自身の身についた歌を歌はせたいのは我等の幼兒に對する友情であり責任であり切なる願である。然らば其標準を何處に求むべきか。

我等の教へてゐる歌が、もしや子供の心に副はぬものでありはずまいか。我々が幼兒の畫方に對する觀察や批評は、幼兒の生命の表はれ、幼兒が感得したる具體的實在の表現として見得ないで單なる外形的形骸や技巧のみを見てゐる爲、幼兒が自分で描き度いと思ふものを、ほんとうに自分の繪として描かせる事が出來難いのか。又、私のしてゐるお話は眞に童心の求めてゐる心の糧を提供してゐるであらうか。そのお話の調理法に於て消化不良を起さしむる處はないか、言葉使ひや身振り等に於てお話の心を傳ふるに缺くる又は妨げる處はないか。……等々

數へ來れば、子供になり得ざる悲しさは、幼兒と我々との間に心の間隔の存する事について、常に不安な氣分がたゞよふてゐる。この不安を持ちつゝ一日又一日を兒等と共に兒等の師の位置に居る我等！（昭和二、四、五）